青年期の家族関係と現在の自尊感情との関連

－潜在的・顕在的自尊感情に着目して－

佐々木　茉音
（安田女子大学心理学部）

問題と目的

近年の日本では，児童期や青年期において，自尊感情が経時的に低下していることが指摘されている。自尊感情の形成には，子どものころからの親の受容的な態度や自立性の尊重など，家庭文化の影響が非常に大きく関わっているとされている。また，小塩・西野・速水（2009）は，人の自尊感情には，意識的な自己に対する感覚である顕在的自尊感情と，非意識的な自己評価である潜在的自尊感情が存在するとしている。

溝上（2010）は，児童期の家族関係と現在の両親イメージが現在の顕在的自尊感情に与える影響について検討したが，両者の間に関連は見られなかったため，本研究では，溝上（2010）が課題として挙げた家族関係を尋ねる時期に着目し，回答者が想起しやすい青年期に設定し，さらに新たに潜在的自尊感情についても調査し関連をみることで，さらに詳しく検討していく。

本研究では，青年期の家族関係および現在の両親イメージが，顕在的自尊感情と潜在的自尊感情に及ぼす影響について検討することを目的とした。

方法

本研究は，女子大学生38名（平均年齢19.61歳）を対象に実施した。青年期の家族関係と現在の両親へのイメージ，顕在的自尊感情は質問紙で，潜在的自尊感情は自作の紙筆版 IAT で回答を求めた。

質問紙の構成は，①家族機能測定尺度：2 因子（凝集性，適応性）20 項目 5 件法，②父親イメージ尺度：3 因子（心理的距離感，父親の強さ，激しさ）21 項目 7 件法，③母親イメージ尺度：3 因子（不明朗，激しさ，不誠実性）21 項目 7 件法，④ Rosenberg の自尊感情尺度：1 因子（顕在的自尊感情）10 項目 5 件法。

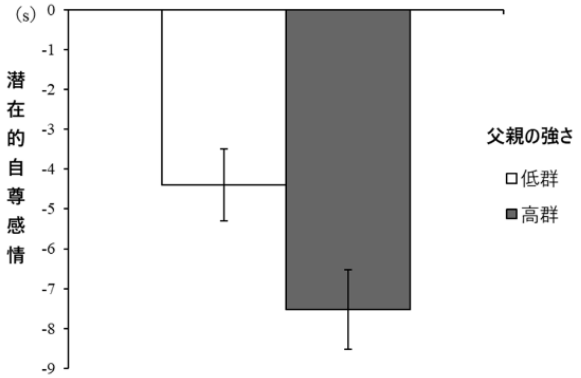
紙筆版 IAT は，単語を分類する実験で，「自分―快感情，他人―不快感情」の組み合わせの第4ブロックと，「自分―不快感情，他人―快感情」の組み合わせの第7ブロックを含めた，計150項目に対して回答を求め，第4ブロックと第7ブロックの反応時間と正答数の差を潜在的自尊感情の指標とした。

結果と考察

以下に結果の一部を示す。

潜在的自尊感情（反応時間）における父親イメージ（父親の強さ）の高低に関する一要因分散分析を行ったところ，父親の強さの高低の主効果が有意であり（$F(1, 36) = 5.441$，$p < .05$），父親イメージ（父親の強さ）低群よりも高群の方が潜在的自尊感情（反応時間）が有意に高いことが認められた（Figure 1）。

Figure 1　父親の強さと潜在的自尊感情（反応時間）



玉宮・小貫（2021）は，青年期後期までの父親の量的関わり（「世話」）が多いほど，大学生の顕在的自尊感情は高いことを明らかにしている。親と子の性別の組み合わせが子どもの自尊感情に与える影響について，自尊感情の潜在的・顕在的両面からの検討が必要であると考えられる。

引用文献

溝上 菜摘（2010）．児童期の家族関係と両親イメージが現在の自尊感情に与える影響　佛教大学大学院紀要　教育学研究科篇，*38*，91-106.

小塩 真司・西野 拓郎・速水 敏彦（2009）．潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連　パーソナリティ研究，*17*(3)，250-260.

玉宮 義之・小貫 胤羽（2021）．父親の量的関わりが大学生の自尊心に与える影響　白鴎大学論集，*36*(1)，33-47.